

## 盟友へ！

北海道農協青年部協議会では、平成 25 年度事業計画の基本方針の中でこう記述している。『「食」という、まさに国民の命を支える産業を担っている我々だからこそ、また農村地域という支え合いが不可欠な環境で生活してきた我々だからこそ持ち得る価値観。それこそが、つながりの大切さであり、命を育む大切さなのである。この価値観をより多くの生活者と共有することにより、互いが互いを思いやる明るい未来を導き出すような、都市と農山漁村の補完関係を構築していきたい。(中略) これまでも青年部では子ども農業体験を中心とした食育事業を展開してきたが、更なる事業の深化が必要と思われる。』

子どもたちに対する食育活動は子ども農業体験をはじめ、全道規模でも各単組でも行ってきている。また全国でも、更には青年部活動に限らず、JA グループとしても、また学校教育においても食育活動は行ってきている。ちなみに文科省が掲げている「食に関する指導の手引き※平成 22 年作成」では、学校における食育の内容に「食物の生産等にかかわる人々への感謝の心をもつ。」という項目が明記されている。しかし、いまのこの食育の成果はどのようなのだろうか？いのちの糧「食」を育む大事な営みは国民にきちんと理解されているのか？農業を守ろう！という都市住民がどれだけこの国に存在するのだろうか？そう考えた時、メディアが行っている世論調査をはじめとした国民意識調査そして今の社会の風潮を鑑みると決してそうとは言えないのが残念ながらこの国の現状だ。食の大切さを否定する人はたぶんいないだろう。でもそれを育む営みである農業の大切さ・必要性を国民の多くが理解していない以上、どんな優れた農業政策が組み立てられても、そんな優秀な政治家が農政を語ってもこの国が多数決に従う民主主義国である以上、そこには限界が生じてしまう。「いのちの糧「食」を育む営みを守る！」そんな当たり前のことが伝わらない…。そんな我々が抱えるジレンマの大本はこういうことにあると思えてならない。

いまこそ、なにが必要か？それはただ一つ。国民の価値感の中で、食の大切さを理解させると同等レベルまで、「農業の大切さ・必要性」を理解させる仕組みを作ること。そうつまり、価値観の変革を起こすような教育からの改革を行うことでしかない。これまでのやり方には、どこにどう問題があり、今後どうアプローチしていくべきか？真剣に考えていか

なければならぬ。そのための今できる最良策が今回提案する企画案だ。企画の立案には、株式会社ノースプロダクションの近江正隆氏にご尽力頂いた。近江氏はこの度、文科省の食育有識者会議のメンバーにも選出された人物だ。想いを同じくする同志とともに、また北海道など関係する機関と更なる連携を深めながら、ここ北海道から我々青年部世代の手で今一度、この国に明かりを灯したい。

我々、農協青年部世代の役割は、いのちの糧「食」を生産すること。そして食の生産現場だからこそ伝えられる教育としての場の提供・関わりにあると思う。いまこそ、我々の青年部の存在意義をこの国に知らしめよう！

平成 25 年 6 月  
北海道農協青年部協議会  
会長 黒田 栄継